

- (13) 四首のうち最後の最後一首になる一三七五番には、左注に「譬喩歌の類にあらず」という編纂者による断わりが記されている。
- (14) 六百番歌合の引用は、新編国歌大観による。歌番号もそれに従う。
- (15) 後拾遺集の引用は、新編国歌大観による。歌番号もそれに従う。
- (16) 新古今集の引用は、日本古典文学全集(小学館)による。歌番号もそれに従う。
- (17) 『八雲御抄』(『日本歌学体系別巻三所収』 卷五・名所部「山」の項。
- (18) 『袖中抄』(『日本歌学体系別巻二所収』 第二「えやはいぶきのさしも草」の項。

寄草	寄草恋
	寄草花恋(統詞花)
	寄草述懐(新拾遺) 寄草祝(檜葉) 寄草無常(瓊玉) 寄草懐旧(遺塵)
	寄草忍恋(新統古今) 寄草初恋(新和歌) 寄草絶恋(後二条)
	寄草恨恋(新後拾遺) 寄草別恋(新明題) 寄草馴恋(柏玉)
	寄草孤恋(雪玉)
	寄寒草恋(統古今) 寄月草恋(統拾遺) 寄菅恋(統後拾遺)
	寄葛恋(統後拾遺) 寄篠恋(新千載) 寄薄恋(新千載)
	寄蓬恋(新統古今) 寄下草恋(新統古今) 寄浅茅恋(為尹千)
	寄女郎花恋(新統古今) 寄夏草恋(大江戸倭歌) 寄秋草恋(大江戸倭歌)
	寄浮草恋(大江戸倭歌) 寄萱草恋(為理集)

草を媒材とする恋歌について、その歌題意識を以上のようにたどってくると、「さしも草」などの新たな草の名を取り入れつつ、この表現形式が活きつづけていることが確認できる。また、そこでの表現形式においては、万葉集の寄物陳思歌に比すれば文芸性の追求の深まりのあることは言うまでもないが、「草」の名を恋情という主題に包括させたものであることは踏襲されていると考えられるのである。

【注】

- (1) 万葉集の引用は、日本古典文学全集(小学館)による。歌番号もそれに従う。また、特に断らない限り、以下の万葉集の引用も同様である。
- (2) 『詠歌一体(八雲口伝)』の引用は、日本歌学体系第三卷(二九六頁)による。
- (3) 『筆のまよひ』の引用は、日本歌学体系第五卷(四三〇頁)による。
- (4) 『正徹物語』の引用は、日本歌学体系第五卷(二五六頁)による。
- (5) 三村晃功「三手文庫蔵『百草和歌抄』の成立——『夫木和歌抄』享受の一断面——」(夫木和歌抄研究会編『夫木和歌抄 編纂と享受』、風間書房、二〇〇八・三)
- (6) 前掲書、二七五頁〜二七六頁。
- (7) 譬喻歌という標題のもとにある歌のすべてが純粹な譬喻歌ではなく、寄物陳思歌に該当する歌も含まれる。また、万葉集中には譬喻歌の標題はなくても、表現上譬喻歌と認められる歌もあるので、この数は集中に譬喻歌と分類されている歌の総数である。
- (8) 卷一一の以下の三首、二四六九番「山ぢさの白露重みうらぶれて心に深く我が恋止まず」、二四八〇番「道の辺のいちしの花のいちしろく人皆知りぬ我が恋妻は」、二四八一番「大野らにたどきも知らず標結ひてありかつましじ我が恋ふらくは」は、「草に寄す恋」の歌としては不審もあるが、集中の配列に従い数に入れていく。
- (9) ほかに「或本」(五首) および「二書」(二首) の歌計七首を収める。
- (10) ほかに「或本」(二首) および「二本」(一首) の歌計三首を収める。
- (11) 二六三四番(寄物陳思)、二八〇八番(問答)の二首は、それぞれ二五〇一番、二四〇八番との語句の入れ替わりのみられるもので、万葉集中では人麻呂歌集歌として扱われている。
- (12) 集中の人麻呂歌集歌は、「正述心緒」一〇首(二八四一〜二八五〇)と「寄物陳思」の一三首(二八五一〜二八六三)の計二三首である。

のさしも草」を詠んだ例としては、和泉式部による「今日もまたか
くやいぶきのさしも草さらばわれのみ燃えやわたらん」（新古今
集・巻一・恋歌一・一〇二二）が挙げられるが、その「さしも草」
については、順徳院の『八雲御抄』や顕昭の『袖中抄』、契沖の『百
人一首改観抄』などに取り上げられている。そこでの解釈をみても、
「いぶきのさしも草」は下句を導く序として理解されるものである。
「寄草恋」題における寄物として歌われているこれらの草は、あく
までも恋情を伝えるための媒材であり、その本質は恋情の伝達をよ
り効果的にするための存在であると考えられるのである。

定数歌の場合、「寄草恋」の歌題が最初にみられるのは宝治百首で
ある。宝治百首は、後嵯峨院が統後撰集の選定のために、その資料
となる歌を当代の歌人四〇名から召した百首で、披講は宝治二（一
二四八）年ごろとされる。春20・夏10・秋20・冬10・恋20・雑20
からなる百題百首で構成され、恋の部に「寄草恋」題の四〇首が収
められている。定数歌における寄恋題の出現は、藤原為忠が長承元
（一一三二）年から保延二（一一三六）年にかけて二度にわたって催
した為忠朝臣家両度百首のうちの後度百首にすでにみられるが、そ
こでは「寄草恋」はなく、恋一五首の部に「寄井恋」「寄鷹恋」「寄
鏡恋」「寄錦恋」「寄糸恋」という独自性のある個性的寄物が提示さ
れている。なお、宝治百首以降では、永享百首、仙洞句題五十首、

正徹千首などに「寄草恋」題が用いられている。

勅撰集において、恋歌の部立のなかに、「草に寄す恋」題をもつ
は、この宝治百首を資料とする統後撰集・二首（六五一・六八一）
をはじめとして、統古今集・四首（一〇〇三・一一二八・一二七〇・
一三五七）、統拾遺集・二首（一〇四一・一〇七三）、新後撰集二首
（一一四二・一一四三）、統後拾遺集・一首（七七四）、風雅和歌集・
一首（三八四）、新千載集・一首（一四八一）、新拾遺集・一首（一
二九六）、新後拾遺集・一首（二三三八）、新統古今集・六首（一〇
六一・一一一一・一一二二・一三七三・一四四七・一五二六）を数
える。このうちの多くは詞書によると、宝治百首、建保六（一二二
八）年〜承久二（一二三〇）年ごろの道助法親王家五十首、弘長三（一
二六三）年内裏百首歌、建仁元（一二〇二）年後鳥羽院五十首歌など
を典拠とするものである。

恋歌における「寄草」という題詞をもつ「草」を媒材とする歌題
の展開に目を向けると、その系譜は次のようにたどることができる。
「寄草恋」における「草」が「草花」に転化するもの、「恋」が「述
懐」「祝」など別の部立に転ずるもの、「恋」が時系列による「初恋」
「忍恋」「絶恋」と表現されるもの、「草」が固有名詞の「月草」「菅」
などに限定されるものという分類が成立するのである。

旅恋 寄月恋 寄雲恋 寄風恋／寄雨恋 寄煙恋 寄山恋 寄海恋
 寄河恋 寄閑恋 寄橋恋 寄草恋／寄木恋 寄鳥恋 寄獸恋 寄虫恋
 寄笛恋 寄琴恋 寄絵恋 寄衣恋／寄席恋 寄遊女恋 寄傀儡恋 寄海人恋
 寄樵人恋 寄商人恋

このうちの「寄草恋」の歌は一〇二二番から一〇三二番までの、
 次のような六組一二首である。

わすらるる人ののきばのしのぶぐさなみだのあめぞつゆけかり
 ける (一〇二二・兼宗)
 こひづまのやがてのきばになりゆけばいとどしのぶのくさぞし
 げれる (一〇二二・経家)
 いまはさはあはれとおもへすがのねのながきころのほどはみ
 つらん (一〇二三・季経)
 夜とともにかわくまもなきわが袖やしほひもわかぬなみのした
 草 (一〇二四・隆信)
 うちのむひとの気色の秋かぜに心そのかやがしたをれ
 (一〇二五・有家)
 あさましやなどかおもひのさしもぐさつゆもおきあへずはては
 もゆらん (一〇二六・寂蓮)
 ももよぐさもよままでなだのめけんかりそめぶしのしぢのは
 しがき (一〇二七・顕昭)

あふことはいつといぶきの峰におふるさしもたえせぬおもひな
 りけり (一〇二八・家房)
 ひとまちしにはのあさぢふしげりあひてころにならすみちし
 ばのつゆ (一〇二九・良経)
 あき風になびくあさぢの色よりもかはるはひとのころなりけ
 り (一〇三〇・家隆)
 いはざりき我が身ふるやのしのぶぐさおもひたがへてたねをま
 けとは (一〇三一・定家)
 ながめするころのねよりおひそめてのきのしのぶはしげるな
 るべし (一〇三二・信定)
 ここで詠まれている草のうち、菅(一〇二三)、萱(一〇二五)、
 ももよ草(一〇二七)、浅茅(一〇二九・一〇三〇)、芝(一〇二九)
 は、いずれも万葉集の寄草恋歌で詠まれているものである。また、
 下草(一〇二四)、忍草(一〇二二・一〇二二)は、植物そのものの
 固有の名前ではなく、普通名詞としての草をいうものである。下草
 は一般的な下生えの草をいい、忍草は「偲ぶ」という心を単なる掛
 詞として用いているものと考えられる。また、さしも草(一〇二六・
 一〇二八)は、「もぐさ」のことであるが、後拾遺集の「かくとだに
 えやはいぶきのさしもぐささしもしらじなもゆるおもひを(巻一
 一・恋一・六一二・藤原実方)」に依拠するものであろう。「いぶき

るが、表現形態においては草を媒材としている恋歌と判断されるものである。

さらに、譬喩歌という標題のもとにある卷三の歌二四首(三九〇〜四一四)のうち、次のような五首は、恋情を草という媒材に託して詠んだ歌、恋愛感情の象徴として草という媒材が詠まれている歌、あるいは、恋の相手を草に喩えた歌であり、これらも草を媒材とする恋歌に分類されるものであろう。

笠女郎が大伴宿禰家持に贈る歌三首

託馬野に生ふる紫草衣に染めいまだ着ずして色に出でにけり

(三九五)

陸奥の真野の草原遠けども面影にして見ゆといふものを

(三九六)

奥山の岩本菅を根深めて結びし心忘れかねつも

(三九七)

大伴宿禰駿河麻呂、同じ坂上家の二嬢を娉ふ歌一首

春霞春日の里の植ゑ小水葱苗なりと言ひし柄はさしにけむ

大伴宿禰家持が歌一首

あしひきの岩根こごしみ菅の根を引かば難みと標のみそ結ぶ

(四一四)

恋の歌に詠まれる、媒材としての草は、原則的には比喩表現であ

り、叙景歌としての実景表現の要素は乏しい。それは、その分類法において漢詩の影響を受けたと考えられる人麻呂歌集の「寄草恋」の歌の表現方法であり、その様式は万葉歌人によって再創造されていったと考えられるのである。

三

歌合において、「寄草恋」題がみられるのは、六百番歌合がその最も初期のものともみなされよう。六百番歌合は、藤原良経の主催した歌合で、建久三(一一九二)年に企画され、翌四年に披講・評定されている。出題は良経によるもので、その歌題は、前半の四季部五〇題と後半の恋部五〇題の二部で構成されており、春15・夏10・秋15・冬10・恋50の百題を纂する。恋部五〇題に関しては、前半の二五題が時間の経過による恋の進行状態に基づく設題、後半の二五題が「寄物恋」の形式の組題となっており、その具体的歌題は次のとおりである。

恋

初恋	忍恋	聞恋	見恋	／尋恋	祈恋	契恋	待恋
遇恋	別恋	顕恋	稀恋	／絶恋	怨恋	旧恋	暁恋
朝恋	昼恋	夕恋	夜恋	／老恋	幼恋	遠恋	近恋

右は、中郎の足疾により、この歌を贈りて問訊せるなり

(巻二・相聞・一二八)

碁檀越、伊勢国に行きし時に、留まれる妻が作る歌一首

神風の伊勢の浜荻折り伏せて旅寝やすらむ荒き浜辺に

(巻四・相聞・五〇〇)

大伴坂上郎女の歌二首

(五六三番・五六四番)

山菅の実成らぬことを我に寄そり言はれし君は誰とか寝らむ

(巻四・相聞・五六四)

大伴坂上家の大嬢が大伴宿禰家持に報へ贈る歌四首

(五八一番〜五八四番)

月草のうつろひ易く思へかも我が思ふ人の言も告げ来ぬ

(巻四・相聞・五八三)

笠女郎が大伴宿禰家持に贈る歌二十四首

(五八七番〜六一〇番)

我がやどの夕影草の白露の消ぬがにもとな思ほゆるかも

(巻四・相聞・五九四)

中臣女郎が大伴宿禰家持に贈る歌五首

(六七五番〜六七九番)

否と言はば強ひめや我が背菅の根の思ひ乱れて恋ひつつもあら

(巻四・相聞・六七九)

広河女王の歌二首

(六九四番・六九五番)

恋草を力車に七車積みて恋ふらく我が心から

(巻四・相聞・六九四)

大伴宿禰像見我歌三首

(六九七番〜六九九番)

我が聞きにかけてな言ひそ刈り薦の乱れて思ふ君がただかそ

(巻四・相聞・六九七)

大伴宿禰家持が童女に贈る歌一首

はね縵今する妹を夢に見て心の内に恋ひ渡るかも

(巻四・相聞・七〇五)

童女が来報ふる歌一首

はね縵今する妹はなかりしをいづれの妹そそこば恋ひたる

(巻四・相聞・七〇六)

大伴宿禰家持が坂上家の大嬢に贈る歌二首 離絶数年、また

会ひて相聞往来す (七二七番・七二八番)

忘れ草我が下紐に付けたれど醜の醜草言にしありけり

(巻四・相聞・七二七)

藤原朝臣久須麻呂の来報ふる歌二首 (七九一番・七九二番)

奥山の岩陰に生ふる菅の根のねもころ我も相思はざれや

(巻四・相聞・七九一)

これらの歌は、その題詞から唱和・贈答の詠であることが知られ

人言は夏野の草の繁くとも妹と我とし携はり寝ば
 (春相聞・一九二二)

(夏相聞・一九八三)

このころの恋の繁けく夏草の刈り払へども生ひ及くごとし

(夏相聞・一九八四)

ま葛延ふ夏野の繁くかく恋ひばまこと我が命常ならめやも

(夏相聞・一九八五)

我のみやかく恋すらむかきつはたにつらふ妹はいかにかあるら

む
 (夏相聞・一九八六)

道の辺の尾花が下の思ひ草今更々に何をか思はむ

(秋相聞・二二七〇)

ここで詠まれている草は、春の相聞歌では、春菜(一九一九)、春

草(一九二〇)、菅(の根)(一九二二)、夏の相聞歌では、夏野の草

(一九八三)、夏草(一九八四)、葛(一九八五)、杜若(一九八六)、

秋の相聞歌では、尾花(薄)・思草(二二七〇)である。これらの歌

にみる媒材としての草は、原則的には比喻表現であり、草の名前か

ら連想される音や言葉、あるいはその形態や草のもっている機能に

意味を求めるものであることは、寄物陳思歌、譬喩歌の手法とも共

通していることになる。

万葉集における、「寄草」の題詞もしくは左注のあるこれらの歌の

表現形式は、作者や作歌事情の判明している相聞歌の中にも多く見
 出すことのできるものである。万葉集の「相聞」は、唱和・贈答の
 意味をもち、親子・兄弟・姉妹・友人などの間の私的情愛を詠むも
 のも含むが、ここでは恋歌における用例に限定しておく。それはた
 とえば巻二や巻四の相聞歌にみる、藤原鎌足、草壁皇子、大伴坂上
 郎女、大伴家持などの歌人による次のような歌である。

内大臣藤原卿、鏡王女に報へ贈る歌一首

玉くしげみもろの山のさな葛さ寝ずは遂にありかつましじ(或

本の歌に曰く、「玉くしげ三室外山の」) (巻二・相聞・九四)

久米禪師が石川郎女を娉ふ時の歌五首(九六番〜一〇〇番)

み薦刈る信濃の真弓我が引かばうま人さびて否と言はむかも

禪師 (巻二・相聞・九六)

み薦刈る信濃の真弓引かずして強作留わざを知るといはなくに

郎女 (巻二・相聞・九七)

日並皇子尊、石川郎女に贈り給ふ御歌一首 女郎、字を大名

児といふ

大名児を彼方野辺に刈る草の束の間も我忘れめや

(巻二・相聞・一一〇)

同じ石川女郎、更に大伴田主中郎に贈る歌一首

我が聞きし耳によく似る葦の末の足ひく我が背つとめたぶべし

聞、という構成をとるが、これらの部立のうち、草を媒材とする歌は、春の相聞、夏の相聞、秋の相聞にそれぞれ収められているものである。「何を詠む」という表現形式で対象を詠む歌には、たとえば、春の雑歌では、「鳥を詠む(二十四首)」「霞を詠む(三首)」「柳を詠む(八首)」「花を詠む(二十首)」「月を詠む(三首)」「雨を詠む(一首)」「川を詠む(一首)」「煙を詠む(一首)」などの用例がみられる。

夏の雑歌では、鳥、蟬、榛、花、秋の雑歌では、花、雁、鹿の音、蟬、蟋蟀、蝦、鳥、露、山、黄葉、水田、河、月、風、芳、雨、霜、冬の雑歌では、雪、花、露、黄葉、月、といった景物が並ぶ。ここでは、相聞歌では詠まれている「草」が、雑歌では対象とされていないことが注目される。

譬喩歌の場合、まとまった歌群数としては、卷一〇の「花に寄する」歌が最大数を持ち、その内訳は、春の相聞に九首、夏の相聞に七首、秋の相聞に二三首、冬の相聞に一首となる。「草に寄する」恋歌は、譬喩歌においては、「花に寄する」恋歌の二三首に次ぐ歌数ということになる。卷七の譬喩歌一〇八首(一一九六〜一四〇三)において、最も多く詠まれているのが、「草に寄する」歌の一七首となり、卷七においては次いで「玉に寄する」一六首、「海に寄する」九首、「衣に寄する」「木に寄する」各八首、「花に寄する」「河に寄する」各七首、「山に寄する」「船に寄する」各五首、「月に寄する」

「藻に寄する」各四首、以下「弓」「雨」「神」「浦の沙」が各二首、「糸」「倭琴」「稻」「鳥」「獸」「雲」「雷」「赤土」「埋れ木」各一首と続く。卷一一・一二の寄物陳思歌の場合、寄物陳思歌の総数はそれぞれ三〇二首、一五〇首となるが、両巻とも最大歌数群はいずれも「草に寄する」恋歌であり、その歌群数が一七首と二七首を数えるのである。

「何を詠む」「何に寄する」の分類項目は、卷七にもみられるものだが、卷七においても同様に、譬喩歌の部に「草に寄する」と題する歌が十七首あるのに対して、雑歌の部には「草を詠む」と題する用例が一例あるだけである。またその歌、「妹らがりがり我が行く道の篠すすき我し通はばなびけ篠原」(一一二二)の場合、その内容は草(篠すすき・篠原)を対象とする叙景歌というよりは、相聞歌に類するものだと理解されるのである。

卷一〇の相聞歌における作者不明の「草に寄する」と題されるのは次のような歌である。

国栖らが春菜摘むらむ司馬の野のしばしば君を思ふこのころ

(春相聞・一九一九)

春草の繁き我が恋大き海の辺に行く波の千重に積もりぬ

(春相聞・一九二〇)

おほほしく君を相見て昔の根の長き春日を恋ひ渡るかも

近江のや八橋の篠を矢はがずてまことあり得むや恋しきものを

(一三五〇)

月草に衣は摺らむ朝露に濡れての後はうつろひぬとも

(一三五二)

我が心ゆたにたゆたに浮き葦辺にも沖にも寄りかつましじ

(一三五二)

巻一一の譬喩歌に収められた四首の場合、左注に「右の四首、草に寄せて思ひを喩へたるなり」と記されており、分類上は譬喩歌とされているが、内容的にはいずれも寄物陳思のなかに纂めるべき表現形式といえる。その四首は以下である。

真葛延ふ小野の浅茅を心ゆも人引かめやも我がなければ

(二八三五)

三島菅いまだ苗なり時待たば着ずやなりなむ三島菅笠

(二八三六)

み吉野の水隈が菅を編まなくに刈りのみ刈りて乱りてむとや

(二八三七)

川上に洗ふ若菜の流れ来て妹があたりの瀬にこそ寄らめ

(二八三八)

ここで詠まれている草については、次のように整理される。

卷七譬喩歌

草の種類

草の名（*印は草の名として未詳あるいは不審のもの）

作者不詳歌

宿の草

土針

山野の草

浅茅 萱 葛 薦 下草 篠 菅 月草
藁 かきつはた *山橘

卷一一譬喩歌

草の種類

草の名（*印は草の名として未詳あるいは不審のもの）

作者不詳歌

山野の草

浅茅 葛 菅 若菜

卷七の譬喩歌における配列とその媒材は以下のとおりである。衣

(三首)・玉(五首)・木(二首)・花・川・海(三首)／衣(五首)・糸・玉(一首)・倭琴・弓(二首)・山(五首)・草(二七首)・稲・木(六首)・花(六首)・鳥・獣・雲・雷・雨(二首)・月(四首)・赤土・神(二首)・河(六首)・埋木・海(六首)・浦(二首)・藻(四首)・船(五首)。このうち最初の「衣」から「海」までの一五首は左注によれば人麻呂歌集歌とされるものである。「衣」から始まる寄物の配列に関しては、前述の巻一一・一二の作者不詳歌、巻一四の相聞の場合と共通していることになる。

万葉集では、寄物陳思歌、譬喩歌以外にも、巻一〇に収められた相聞歌のなかに、「草に寄する」と題された、草を媒材として詠まれた恋の歌がある。巻一〇は、四季の部立をもち、春の雑歌、春の相聞、夏の雑歌、夏の相聞、秋の雑歌、秋の相聞、冬の雑歌、冬の相聞、夏

二

万葉集における譬喩歌形式の恋の歌は、卷三・七・一〇・一一・一三・一四にあるが、最も多くの歌を収めるのが卷七で、その数は一〇七首にのぼる。卷七の後半部に纂められた譬喩歌部では「寄何」という形式の題詞を特徴とするが、これは同巻の冒頭におかれた雑歌部の「詠何」という形式の題詞と対をなすものとなっている。「詠何」の形式の雑歌は卷一〇にも収められているが、この形式については六朝の「雑詩」に同様の形式がみられることはすでに指摘のあるところである。

これらの譬喩歌部の恋の歌のうちの「寄草」の題をもつものが、卷七の一七首（一三三六～一三五二）と、卷一一の四首（二八三五～二八三八）となる。

冬ごもり春の大野を焼く人は焼き足らねかも我が心焼く

（一三三六）

葛城の高間の草野はや知りて標刺さましを今そ悔しき

（一三三七）

我がやどに生ふる土針心ゆも思はぬ人の衣に摺らゆな

（一三三八）

月草に衣色どり摺らめどもうつろふ色と言ふが苦しき

紫の糸をそ我が搓るあしひきの山橋を貫かむと思ひて
（一三三九）

ま玉つく越の菅原我が刈らず人の刈らまく惜しき菅原
（一三四〇）

山高み夕日隠りぬ浅茅原後見むために標結はましを
（一三四一）

言痛くはかもかもせむを岩代の野辺下草我し刈りてばへに云ふ、「紅の現し心や妹に逢はざらむ」
（一三四二）

真鳥住む雲梯の社の菅の根を衣にかき付け着せむ兒もがも
（一三四三）

常ならぬ人国山の秋津野のかきつはたをし夢に見しかも
（一三四四）

をみなへし佐紀沢の辺のま葛原いつかも繰りて我が衣に着む
（一三四五）

君に似る草と見しより我が標めし野山の浅茅人な刈りそね
（一三四六）

三島江の玉江の薦を標めしより己がとそ思ふいまだ刈らねど
（一三四七）

かくしてやなほや老いなむみ雪降る大荒木野の篠にあらなくに
（一三四八）

（一三四九）

また、万葉歌人にとっては、草は鑑賞の対象ではなく、日常生活の一部として認識されていたであろうことも、寄草の恋歌が多く存在する理由に挙げられるだろう。寄草の恋歌に詠まれた草には、垣根や屋根の材料となるもの、束ねたり編んだりしてつくられる日用品の材料となるもの、衣服の材料となるもの、薬用・染料として用いられるもの、食用となるもの、祭礼や行事などを行う際に飾りとして用いられるものなど、人間生活に密着した性質があることが指摘できる。また、「忘れ草」のように、身につけると憂いや苦しみが忘れられると信じられていたものや、「草結ぶ」（三〇五六）という、まじないの一種として、命の無事、愛の普遍を祈って結んだ草の結び目が解けない間は願い事がかなうと信じられていた信仰など、民間信仰、習俗にかかわる「草」も詠まれている。

万葉集では、草を媒材として心情を伝えるという表現形式は、恋歌に限らず、相聞以外の分類に属する雑歌のなかにも用いられており、それは次のような例が示すところである。

柿本朝臣人麻呂が羈旅の歌八首 (二四九番〜二五六番)

飼飯の海の庭良くあらし刈り薦の乱れて出づ見ゆ海人の釣船

(卷三・雑歌・二五六)

帥大伴卿の歌五首 (三三二番〜三三五番)

浅茅原つばらつばらに物思へば古りにし里し思ほゆるかも

(卷三・雑歌・三三三)

忘れ草我が紐に付く香久山の古りにし里を忘れむがため

(卷三・雑歌・三三四)

市原王、宴にして父安貴王を禱ぐ歌一首

春草は後はうつろふ巖なす常磐にいませ貴き我が君

(卷六・雑歌・九八八)

高宮王、数種の物を詠む歌二首 (三八五番・三八五六番)

菖莢に延ひおほとれる尿葛絶ゆることなく宮仕えせむ

(卷一六・有縁雑歌・三八五五)

また、表現形式は「草に寄する恋」を踏襲するものであるが、分類は相聞ではなく、「旋頭歌」や「挽歌」となっている次のような用例もある。

新室の壁草刈りにいましたまはね草のごと寄り合ふ娘子は君が

まにまに (卷一一・旋頭歌・二三五一)

かなし妹をいづち行かめと山菅のそがひに寝しく今し悔しも

(卷一四・挽歌・三五七七)

万葉歌人にとって「草」という媒材は、このように、一般的で普遍的性のある対象であったことが理解されるのである。

二首」と記されており、歌の内容は、三四五五〜三四八〇の二六首が正述心緒、三四八一〜三五六六の八六首が寄物陳思に相当するものになっている。寄物陳思歌の媒材と配列は、衣(三首)・器材(七首)・植物(木・草・花・草)(一八首)・気象(一二首)・動物(鳥・獵獸・馬)(二二首)・地象(船を含む)(二三首)・神祇であり、草に寄せる恋の歌(八首、三四九七〜三五六一・三五〇五〜三五〇八)にみる草の種類と名称は次のように整理される。

巻一四相聞	草の種類
作者不詳歌	草の名(*印は草の名として未詳あるいは不審のもの)
山野の草	萱 小菅 紫草 玉葛 *たわみずら *はだすすき *ねつこ草

寄物の配列に関しては、巻一一の人麻呂歌集歌が神祇で始まる構成であるが、それ以外の巻一一・一二の作者不詳歌、巻一四の相聞の八六首ではいずれも衣から始まる構成をとっている。

万葉集における人麻呂の歌には、題詞に人麻呂の作であることを明記する八〇余首のほかに、左注などに「柿本朝臣人麻呂之歌集出」と記されていて、人麻呂歌集から採録したとみられる歌三六六首がある。前者は人麻呂作歌と称され、後者は歌集歌と呼ばれる。歌集歌が人麻呂作か否かについては諸説あり、いまだ明らかではないが、寄物分類については、歌集歌の原形にすでに存在していたことが認

められるものである。万葉集の歌の分類には、漢詩の分類法に依拠しているものがあり、相聞歌における、寄物陳思歌、正述心緒歌、譬喩歌の三分類も、毛詩大序の六義説によったものとされている。

このように寄物陳思歌という表現形式には漢文学の影響があり、寄物の配列にもおそらく人麻呂歌集編集者による一定の基準の案出があつたものと推測されるが、寄物のなかで「草」という媒材が多く詠まれている現象については、万葉人と植物との関わりの深さの反映をみるべきであろう。万葉歌人の植物に対する強い関心は、万葉集に収録された歌のうちの約三分の一にあたる一七〇〇余首に植物が詠み込まれていることから窺えよう。

植物のなかでも特に「寄草」の恋歌群がまとまった数で存在する理由のひとつには、草という媒材の種類が多さが挙げられるだろう。たとえばここで草の名として頻出する「菅」は、品種が二百種もあるとされる日本の山野に自生する野草で、万葉集においても「有間菅」(二七五七・三〇六四)、「巖菅」(二四七二)、「岩本菅」(三九七・二七六一)、「小菅」(二四七〇・二四七一)、「しづ(静)菅」(二八四)、「白菅」(二八〇・二八一・一三五四・二七六八)、「七相菅」(三四七)、「真菅」(三〇八七)、「三島菅(三島菅笠)」(二八三六)、「山菅」(二四七四・二四七七・三三九一・三〇五一・三〇五三・三〇六六・四四八四)などの用例が確認できる。

首・花(四首)・玉の緒(七首)・隠りづ・貝(四首)・鳥(九首)。媒材には、不明であったり、確定が困難であったりするものもいくつかあり、配列においても、二七〇一番から二七一八番までの一八首は「川に寄せる恋」の歌であるが、そのなかに二七〇七番の「沼に寄せる恋」が混じるなど混乱が生じている。ここでの草を媒材とする二三首(二七五五〜二七七七)にも、二七六七番「あしひきの山橋の色に出でて我は恋ひなむを人目難みすな」、二七七三番「さす竹の世隠りてあれ我が背子が我がりし来ずは我恋ひめやも」のように、この二首に詠まれた「山橋」や「竹」は草ではないのだが、「寄草」のなかに収められているなど、編纂の乱れが散見される。この二三首の草の種類とその名は次のように整理される。

作者不詳歌	草の種類	草の名(*印は草の名として未詳あるいは不審のもの)
	宿の草	蓼
	道辺の草	柴草 草
	山野の草	浅茅 葦 にこ草 ぶぐ かや 月草 夏草 薦 篠 菅 有間菅 岩本菅 小菅 白菅 玉葛 *山橋 *竹

卷一二の寄物陳思歌の場合、二八五一番から二八六三番までの一三首は、左注によると「柿本朝臣人麻呂之歌集出」であり、二九六

四番から三一〇番までの一三七首が出典不明の歌として編集されている。草を媒材とするのは、人麻呂歌集歌に二首、作者不詳歌に二七首あり、その媒材と配列は、人麻呂歌集歌においては、紐および衣・道・神祇・日・風・川(二首)・木・草(二首)となっており、作者不詳歌においては、衣(九首)・紐および帯(五首)・鏡(四首)・針・剣(二首)・弓(五首)・たたり・眉・たすき・縵(二首)・薦・木綿・橋・舟・田(二首)・日・月(七首)・衣・川(十首)・池・沼(三首)・堀江・垂水・波(四首)・雲(三首)・火の気・霧(三首)・霞・露(六首)・霜(二首)・雨・木(二首)・草(二七首)・藻(五首)・玉の緒(三首)・貝・虫(二首)・鳥(九首)・馬(三首)・鹿・神祇となっている。卷一二の寄物陳思歌における草の種類と名称は次のように整理される。

作者不詳歌	草の種類	草の名(*印は草の名として未詳あるいは不審のもの)
	人麻呂歌集歌	菅 山菅
	山野の草	麻 浅茅 月草 忘れ草 かや 葛 さな葛 玉葛 菅 有間菅 山菅 *目不醉草 *藤

卷一四は二百数十首の東歌を集めているが、題詞に相聞とある三四五五番から三五六六番までは、目録には「未勘国相聞往来歌百十

見渡し三室の山の巖菅ねもころ我は片思そするへに云ふ、
 「三諸の山の岩小菅」
 (二四七二)

菅の根のねもころ君が結びてし我が紐の緒を解く人はあらじ
 (二四七三)

山菅の乱れ恋のみせしめつつ逢はぬ妹かも年は経につつ
 (二四七四)

我がやどは甍しだ草生ひたれど恋忘れ草見るにいまだ生ひず
 (二四七五)

打つ田に稗はしあまたありと言へど選らえし我そ夜ひとり寝る
 (二四七六)

あしひきの名に負ふ山菅押し伏せて君し結ばば逢はざらめやも
 (二四七七)

秋柏潤和川辺の篠の目の人には忍び君に堪へなく(二四七八)
 さね葛後も逢はむと夢のみをうけひ渡りて年は経につつ
 (二四七九)

道の辺のいちしの花のいちしろく人皆知りぬ我が恋妻はへ或本
 の歌に曰く、「いちしろく人知りにけり継ぎてし思へば」
 (二四八〇)

大野らにたどきも知らず標結ひてありかつましじ我が恋ふらく
 (二四八一)

は

ここで詠まれている草の種類は、山野に自生する草、宿に生える草、道の辺の草、田の草に分類され、草の名としては、次のように整理される。

人麻呂歌集歌		草の種類	草の名(*印は草の名として未詳あるいは不審のもの)
宿の草	田の草	道辺の草	山野の草
(宿の)草 しだ草 忘れ草	稗	(草深) 百合 *いちし	浅茅 葦 山菅 篠 *山ぢさ *大野
			しり草 菅 小菅 巖菅 さね葛

巻一一には、人麻呂歌集歌の場合ほどは配列の整理がされてはいないが、同じく寄物陳思の題詞をもつ一八九首(二六一九〜二八〇七)の出典不明の歌群がある。その配列と媒材は以下のとおりである。衣(八首)・縵・帯・枕(三首)・鏡(三首)・太刀(三首)・弓(三首)・鼓・灯火・筵・橋・杣・浮け(不明)・墨繩・蚊火・板屋・馬(三首)・道・神祇(八首)・月(二〇首)・雲(三首)・風(三首)・霧・雨(五首)・露(六首)・霜・土・山(四首)・鴻・瀬・淵・川(六首)・沼・川(二一首)・沼・池・堰・野・埋れ木・こつみ・埴生・海(一九首)・舟(五首)・木(五首)・草(三首)・藻(五

二首」と記された「寄物陳思」の表現形態をもつ八六首(三四八一〜三五六六)があり、そのうちの八首(三四九七〜三五〇一、三五〇七〜三五〇八)に草に寄する恋の歌がみえている。さらに、巻一〇の相聞歌のなかにも「寄草」の題詞のある恋の歌が八首(一九一九〜一九二一、一九八三〜一九八六、二二七〇)確認できる。

寄物陳思歌は万葉集では巻一一・一二に収められているが、目録によればこの両巻は、古今相聞往来歌の上下となっており、対をなすものである。歌数は、巻一一が四九〇首⁹⁾、巻一二が三八〇首¹⁰⁾であるが、いずれも作歌事情は明らかではない。両巻ともに柿本人麻呂歌集の歌の採録がみられ、また、作者不詳、「季語」のない相聞歌を収録している。寄物陳思歌は、物を媒介にして自己の恋情を述べる歌とされ、この両巻では、寄物として用いられている事物に応じて、神祇・天象・氣象・地象・動物・植物・器材・衣服・玉貝・雑の十部に分類、配列している。「草」はこのうちの植物の分類に含まれるものである。

巻一一の歌四九〇首のうち、左注に「柿本朝臣人麻呂之歌集出」と記されているところの、人麻呂歌集から採録したとされるものは、正述心緒の歌四七首(二二三八〜二四一四)、寄物陳思歌九三首(二四一五〜二五〇七)、問答歌九首(二五〇八〜二五二六)の計一四九首¹¹⁾を数える。このうちの寄物陳思歌の媒材と配列をみると、神祇(四

首)・天地・山(七首)・川(七首)・海(七首)・沼・大地・石(二首)・玉(四首)・雲(四首)・霧・雨(二首)・霜・風・月(五首)・草(一七首)・玉藻(二首)・木(六首)・鳥(三首)・獸・船・蚕・習俗(二首)・太刀(二首)・櫛・鏡(二首)・枕(二首)・衣・弓・卜占(二首)となっており、草に寄せる歌の数が群を抜くことが注目される。

その「草」を媒材とする一七首は、二四六五番から二四八一番の以下の歌である。

我が背子に我が恋ひ居れば我がやどの草さへ思ひうらぶれにけり
(二四六五)

浅茅原小野に標結ひ空言をいかなりと言ひて君をし待たむ
(二四六六)

道の辺の草深百合の後もと言ふ妹が命を我知らめやも
(二四六七)

湊葦に交じれる草のしり草の人皆知りぬ我が下思ひは
(二四六八)

山ぢさの白露重みうらぶれて心に深く我が恋止まず(二四六九)

湊にさ根延ふ小菅ぬすまはず君に恋ひつつありかつましじ
(二四七〇)

山背の泉の小菅なみなみに妹が心を我が思はなくに(二四七一)

寄_レ海恋など、万物によせて出すも、心はひとしき也。よせ恋の題には忍恋、いのる心、うらむる心、逢心、別の心、いづれにもよむべき也。ふるき名所などにもよそへて、心をさまざまにめぐらすべし。祈恋と出したるには、かならずその心をとりあつめてよむべき也。恋の歌には春夏秋冬いづれをよむともくるしからず」と解説されている。古今集以来、勅撰集恋部の構成は、恋愛の進行過程に従って、「逢はぬ恋」の歌に始まり、恋愛が終わった後のさまざまな心理をうたった歌で終わるといふ配列がなされているが、『筆のまよひ』においては、「寄せ恋」の形式においても同様の構成を基底とすることが指摘されていることになる。

草を媒材とする恋歌においては、このように「寄せ恋」の系譜をたどることができるが、その一方に、歌題を「草」に限定する類題集の系譜も確認できる。たとえば、中世の類題集のなかの『百草和歌集』は、「草」を媒材とする和歌集である。この和歌集については、三村晃功氏による「三手文庫蔵『百草和歌抄』の成立——『夫木和歌抄』享受の一断面——」にて詳細な検討が加えられているが、三村氏はその論考において、「歌題を『草』に絞って類聚した類題集の系譜⁵⁾」について、貞観・天元年間頃の成立（九七六〜九八二）とされる『古今和歌六帖』に始まり、大永四年から慶長三年（一五二四〜一五九八）までには成立したと推測される『纂題和歌集』までを検証

されている。⁶⁾

本稿では、草を媒材とする和歌のこのような系譜をもとに、恋歌における「草」という媒材を巡って、その歌題意識と表現形態について考察してみたいと思う。

一

万葉集における「草」を媒材とする恋歌はどのような内容のものであるか。題詞や左注に「草に寄する」と記されている恋歌、もしくは表現形態が「寄草」である恋歌の多くは、譬喩歌、寄物陳思歌に収められている。譬喩歌という標題をもつ歌は万葉集全体では一六四首（短歌一六二首、長歌一首、旋頭歌一首）あるが、そのうち「草に寄する」という題で詠まれているのは、巻七に一七首（一三三六〜一三五二）、巻二に四首（二八三五〜二八三八）の計二二首を数える。また、寄物陳思歌は巻一・一二の両巻にみえ、歌の総数は四三二首（「或本歌」を除く）となるが、そのなかで、「草に寄する」歌、すなわち草を媒材とする恋歌とされるものは、巻二に一七首⁸⁾（二四六五〜二四八一）と二三首（二七五五〜二七七七）の歌群、巻二に二首（二八六二・二八六三）と二七首（三〇四九〜三〇七五）の歌群があり、その歌数は計六九首となる。その他の寄物陳思歌としては、巻一四に、目録では「未勘国相聞往来歌百十

草を媒材とする恋歌

青木 眞知子

はじめに

万葉集^①には、「草に寄する」という形態で詠まれた恋歌群が存在する。その最大のもは、巻一二の寄物陳思歌中の二七首の歌群であるが、同じく寄物陳思歌を収めた巻一一には一七首と二三首、巻七の譬喩歌の中にも一七首の歌群が確認される。このように、万葉集における草を媒材とする恋歌群の多くは、譬喩歌、寄物陳思歌という、小部立のなかに含まれるものである。これらの小部立は、雑歌・挽歌とならぶ万葉集の三大部立のひとつである相聞歌の補助的部立とされるものであるから、そこに含まれる歌の内容はおのずと恋歌に限定されることになる。

万葉集における相聞歌は、正述心緒歌、寄物陳思歌、譬喩歌の三つに分類されているが、この分類は人麻呂歌集の編者の案出と考えられており、その分類法に毛詩の六義の影響があることもすでに指

摘のあるところである。

中世の歌論書には、万葉集の寄物陳思歌・譬喩歌に詠まれたこのような「寄せ恋」の形式についての言及があり、早くは『詠歌一体』^②に、「近代の歌は、ただひとへによむなり。但、よせ恋などの中にはさる事もありぬべけれど、いかさまにも上句の中にその事とはきこゆべきにや」とあり、「寄せ恋」の語がみえている。『正徹物語』^③には、和歌初心者の心得を述べた箇所「初心のときは寄_レ月恋、寄_レ花恋などのよせ物の恋はよみにくきやうに覚ゆる也。扱、見恋、顯恋など物にもよせぬ題はよみやすくおぼゆる也。後の心には寄せ恋の題などはやすく、ただ聞恋、別恋などが大事也。」との見解が示されている。この主張を敷衍したとされるのが、『筆のまよひ』^④の「恋の題」についての記述で、そこには、「恋の題の事、さまざまの事を_レ出せり。恋の本意といふは、初恋、忍恋、待恋、逢恋、別恋、恨恋、忘恋、絶恋、久恋、これら也。またよせ恋とて、寄_レ月恋、寄_レ山恋、